

中国最南端雷州半島

死闘した独歩七十大隊

香川県 猪熊 保

―猪熊さんは南支の節兵団だそうですね、私も同じ兵団の独立歩兵第六十六大隊です。何年兵でしたか。

私は大正八年八月十五日生まれですから、昭和十四年徴収兵です。昭和十七年七月八日召集で丸亀のお寺に集まって独立歩兵第七大隊（田村部隊）要員として一週間後に出発。台湾の馬公から香港經由海南島の海口に昭和十七年八月に上陸した。その間駆逐艦が護衛してました。

―田村部隊はどこに駐屯していたのですか。

田村部隊は四個中隊で約千百人ぐらいの人員で、海南島の海口に駐留していて、海南島には海軍の陸戦隊が多く警備していました。

私は重機関銃隊で瓊山で三か月初年兵教育を受けた。

十八年の二月雷州半島に無血上陸をし、独立混成第二十三旅団（純兵団）に配属されたのです。司令部は寸金橋に在って、雷州半島に前線をひろげて、遂溪、懸背嶺に陣地を構築して、終戦まで雷州半島にいました。

―私も雷州半島の作戦に北の方から陽動して約一週間ほど戦闘をした経験がありました。本隊の純兵団主力が湘桂作戦に出動したが、その間少数の兵力で米装備の大軍に包囲されていたわけですね。

それでは、終戦前の独歩七十大隊の、とくに昭和二十年七月三十一日から八月玉碎寸前の死闘のようすをお話しします。その時、うちの第七十大隊（節第九四〇二部隊）は雷州半島の付根から北七、八十キロほどのところに、各中隊ごとに、守備していました。各隊の間隔は十五キロぐらい離れた最前線です。週一、二回敵襲がある。ので、歩哨、不寝番、分哨、討伐と連続勤務でした。

我々の第一中隊（百二十人）は懸背嶺に駐屯して、山の頂上七、八十メートルのところ、トーチカ三と尾根型鉄条網を張って周囲百メートルの楕円型の壕を掘っていました。毎晩南京虫にくわれ、マラリアも二度わずらっ

た(四十一度以上の高熱)。

—その時猪熊さんほどの陣地で戦闘していたのですか、兄弟大隊の我々の部隊は当時、広西省の桂林北方で米装備の大軍と死闘していたわけで、なにかの因縁でしょうか。

七月三十一日、我が隊、西村軍曹以下七人は分哨勤務についていました。二、三日前から密偵(スパイの一種)の情報があって、「敵の三個師は我々部隊を目標に南下しつつあり」ということを知っていた。各人は可成り緊張していた。もしや百倍に近い重慶軍(中国の正規、蒋介石軍)とあれば、手ごわいものと考えざるをえませんでした。手榴弾や砲弾等は、前もって準備していたけれど、何だか場合によっては、「二、三日のいのちか」と考えざるをえなかった。

七月三十一日夕刻、予想通り、迫撃砲弾をうちこんで来た。二十〜三十メートル後方で破裂、第二弾は前方二十〜三十メートル、三番目は我々の五〜七メートル程度のところだった。そこで、近くにあったトーチカへもぐりこんだ。

その夜はまったく平静だったが、夜中には敵の斥候らしい足音がガサガサという不おんな音がするので、誰何したがなんの音沙汰もない。ところが、放した豚がウロウロしていたようであった。

—夜間は、とくに敵と対していたり、歩哨に立っていると、ちょっとした音にも全神経を使うもので、その時の気持ちはよくわかりますが、なにもなくてよかったです。

翌日八月一日、朝飯を食おうとしていた時、突然至近弾が破裂、しばらくすると、右の方から、また左から迫撃砲三門で、かなりはげしく連続発射してくる。距離はある程度はなれている大木のしげっている部落であることは確実だった。

我が方も敵のやむまをみて、二、三発発射すると、物すごくお見舞いがくる。耳をつんざく音ははげしいが、迫撃砲だからトーチカのなかにいればほとんど被害もなかった。物体をこわす力がないので、おそれることもなかった。

こんな状態が午後四時前後までつづいて、敵の砲撃は

何百発とも数知れず、撃ち込まれた陣地は小さな穴だらけだった。その後敵の援護射撃は一段とはげしくなり、予想通り真正面から、又左前方から、歩兵らしい突撃体勢で我が方へ接近してくる。

私、猪熊もはじめて小銃の引金を引いた。一発づつだが、連続で一列縦隊の敵に対してうちまくった。前盒（前側の弾入れ）は空になった。後盒のを十発射った時、銃眼のきわで物すごい爆発音がした。風圧か、なにかわからないが、其の瞬間尻もちをついた。

なんも痛みもないのに、立った時血がいっぱい、不思議でならない。「猪熊どこをやられた」とどなって聞いてくれたが、傷も見当たらない。わずかに左胸の下の方に傷があったが、穴ではなかった。「胸らしい」と言う。「大丈夫だ死なません」と叫んでくれたようだった。自分は、四時頃あたりからは「今日一日の命」と断念していたせいか、不安とか、情けないとか、こういうことは、全然考えていなかったが、一瞬の出来事で、其の後は、それを通り越えていた。自分ながら、くそ度胸がついていたのが、今になっても、不思議でならない。

その時、衛生兵がやって来た。包帯でもしてくれるのかと思うと、そうでないらしく、「今池（軽機関銃の弾薬手で同年兵）がやられているから、そばでみてくれ」というなり「猪熊、小銃を貸せ」と言って走り去ってしまいました。

— 敵の攻撃を受けている。兵員は少ない、そのうえ貴方は負傷している、まったく死を覚悟するのも当然ですが、その後の攻撃はどうなりましたか。

そのとき、敵は鉄条網のところまで、喚声をあげて突撃して来て、手榴弾を投げ込んで来ている。敵の軽機関銃は連続射撃でした。こちらの軽機は全部故障していたので応戦は出来ない。

— 重機関銃一挺だけ頼もしくうっていたようである。勿論こちらも手榴弾を投げているが、現在何人残っているのか皆目わからない。浜本中隊長が応援に来て、指揮をしている声がしていた。

かたわらにいた今池は「水をくれ」とうなる、なんとも言うが、水は山の上で一滴もない。むろん、朝飯も昼飯も食っていなかったがこのようなことは全然忘れてい

た。

四百メートル程度離れていた左の陣地には田中曹長以下二十人ぐらいいいたが、我々の陣地より先に突撃に達したが遮へいする物がないので、またたくまに全員玉碎してしまった。その勢いで敵は左側面からも突撃でやって来た。アツツ島や硫黄島や沖繩などの玉碎は、このありさまだったろうと、フト一瞬ひらめいただけだった。

弾があたるのなら頭にあたってほしいと思って、鉄兜を脱いで腹のうえに置いた。今池は三十分ほどもがいて「痛い、痛い」とか「苦しいから殺してくれ」とも言った。これは自爆されたら困る。「私も共連れになってしまう」と思い、二発の手榴弾を手の届かないところへ隠したが、その後咳がのどにひっかかるようになると、まもなく戦死してしまった。実に可哀相だったが、今にも私も一緒だと思ってさほど同情もしていなかった。私も手榴弾二発だけしかなく、一発は投げて、一発は胸に抱くつもり、安全栓を抜いた。一発、つつ手に持って、おおむけになって空を眺めて茫然としていたことを思い出しますよ。

頭のうえを、右から左、左から右に薄暗くなるなか、火を吹いて飛びかっているようすは花火の競演をみているような気持ちだった。物すごい破裂する音もさほど大きいとは思えなかった。

——もう駄目だ、助かりたいという気持ちだが、あきらめというか、自然に従うという気持ちなのか、生命が消えていく、ぎりぎりの時でしたね、大変な体験ですなあ。

敵に突撃されてからの時間は、かきもくわからないが、一時間ぐらいだろうか、敵の支那語の叫び声が急におとなしくなった頃、おかしいと、ただ茫然としていただけだった。

鉄条網があったため、肉迫戦はお互い出来なかった。十五〜二十メートル程度で手榴弾をぶっつけあうだけだったわけ。かなりの死傷者があるだろうと想像はついていた。

一旦敵はひいたが、明日また出直してくることは間違いないだろう。百倍まではないにしろ、「雲霞の如く」といっても過言ではない。この目でみている友軍の戦死し

た者はそのままで、小指だけ切断して遺骨とするため、紙にそれぞれの名前を書いて、西村軍曹の雑囊のなかに納められていた。

本部との電話線は、戦闘前に切断されているので、夜陰に乗じて、部隊長に報告のため決死の伝令が二度行った。その返事は「馬頭嶺（約二十キロ後方）へ移動せよ」というものであったらしい。

およそ午前二時頃だったと思うが、ハッキリしないが重要書類は屋内で焼却「弾薬は持てるだけ持て」「負傷者も歩ける者は歩け」といわれた。「被服は外出用を着用してよし」「食糧品は便所へ捨てろ」と言われた。

―撤退は、負け犬のような気もするし、臆病になりやすいものでいやなものです、我が方も犠牲があつたでしょう。

進撃するのは気合がかかるが、後退は嫌な気持ちだった。四年近い間のはじめての体験でした。馬頭嶺まで移動し、一旦中隊の兵舎へはいった。

私は翌日、野戦病院に入院したが、戦況がきびしいので、我々患者の枕もとには、格納油のついたままの小銃

と弾薬を置いてくれる。最後の戦闘なんだろう。このようなことは、実に嫌な気分であった。

戦場で手榴弾戦をやっている方がなんぼか兵隊らしい生きざまだろう。この二日間の戦死者、負傷者はあわせて三分の二、無傷は三分の一だと聞いた。隊員二百十人であるので、無傷は四十人ぐらいだったわけだ。

八月十七日頃に聞いた話では、敵は六百人の戦死傷者といっていたがさだかではない。肉迫（白兵）戦となると、人間は不思議なほど度胸がつく、まったく考えられない体験である。思えば感無量である。いまは平凡な、日常生活でも誠にさいわいであるという風に考えられる。私は人生にかけがえの無い体験をしたと、喜んでいるものだ。

―僅かな兵力で玉碎寸前までにいった独歩七十六隊。公刊戦史の片隅にも記録されない、たくさんさんの独立部隊の戦闘状況を細かくお話いただき有り難うございました。特に死に対し、掛けがえのない体験を、今も前向きに感謝しておられることに、本当に敬意を表します。星 澤。